

全寮制高等学校における教師と生徒の信頼関係づくりに関する研究 －教師の関わり(言動)に着目して－

稲葉 光*・松島 生幸*・稲垣 応顕**

(令和3年2月1日受付；令和3年4月30日受理)

要 旨

本研究は全寮制高等学校に勤めるA教師へのインタビュー調査から、全寮制高等学校において教師が生徒と信頼関係をつくるためにどのような関わり(言動)が行われているのかについて、その関わり(言動)方に示唆を得ることを目的とした事例研究である。質問項目①(信頼される、されない教師のイメージ)、②(最も信頼関係を築けたと感じた生徒との思い出)、③(生徒と信頼関係を築く上で心がけていること)の順に大谷(2007)が考案したSCAT法を用い回答を整理した。結果、質問項目①では全寮制高等学校ならではの特徴として、教師は寮生活であるがゆえに、教師と生徒の関係より生徒同士の関係性の方がより重要であると考えていた。質問項目②では、全寮制高等学校における教師と生徒の信頼関係形成では、教師側からは働きかけないという一定の距離感を保った関わりが重要であることが語られた。質問項目③では、高等学校において重要であるのは“自己実現すること”であり、教師が積極的に介入(リード)していくというよりも、その過程における生徒の考えを尊重し、その目標達成に向けて支援していくことがより望ましいとの考えが語られた。今後の課題としては、インタビュー対象者を拡大していく中で寮生活での関わり(言動)の視点も踏まえて検討していく必要があると示唆された。

KEY WORDS

Teacher 教師, Student 生徒, Boarding high school 全寮制高等学校,
Teacher's relationships (words and actions) 教師の関わり(言動)

1. はじめに

高見(2004)は、生徒の抱える悩みや課題は多種多様であると述べ、教師への自発相談は教師と生徒との信頼関係の形成からなされると指摘している。筆者らはこの見解を支持し、生徒が充実した学校生活を送る上で、教師と生徒の信頼関係は不可欠であると考えている。

文部科学省(以下、文科省：2019)の「平成30年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、年間30日以上欠席した不登校の生徒は、前年度比14.2%増の16万4528人であり、6年連続で増加した。不登校の要因のうち、「学校における人間関係」に課題のある者の中で、教職員との関係を巡る問題の割合は小学校で50.9%、中学校で45.0%であった(文科省、2019)。このことから、不登校に関して教師と生徒の人間関係が大きな要因となっていることが示唆される。

他方、今日、不登校を引き起こす原因の一つとしても注視されるいじめ問題について本間(2003)は、中学生のいじめ加害者のうち、いじめをやめたいきさつに関する記述では、教師の影響(教師からの説諭など)が最も多く、「先生と話してよく分かった」など、生徒から教師への一定程度の信頼感を寄せる記述が見受けられている。また、中井・庄司(2008)においても、生徒の教師に対する信頼感が学校適応感を促す働きをすることが指摘されている。筆者はこれらの論述を概観し、改めて生徒指導を有用に実践するためには、教師と生徒が信頼関係を結ぶことが不可欠であると考え。加えて、大塚・吉村・津川(2007)によると不登校経験年数の多い生徒や小中学校ともに不登校を経験した生徒は高等学校において、寮生活によって生活が支えられ、登校できるようになることが指摘されている。また大塚・吉村・津川(2007)は同文献で、全寮制高等学校においては通常の学校に比べて寮生活がある分、生徒の生活が支えられることを述べている。つまり高等学校に寮生活が加わることにより通常の学校よりも他の教師や生徒との関わる時間が増え、教師との信頼関係づくりに関しても全寮制高等学校独自の関わり(言動)方があると窺われる。

本研究では上述の論述を支持したうえで、全寮制高等学校に勤める教師へインタビューを行い、全寮制高等学校において教師が生徒と信頼関係をつくるためにどのような関わり(言動)が行われているのか、その関わり(言動)方に示唆を得ることを目的とする。

2. 信頼感について

本研究を進める上で、「信頼」と「信頼感」の用語について概念を整理していく。例えば山岸ら(1995)は、一般的に信頼には人間性一般に対する善良さである一般的信頼と特定の個人と結ぶ状況要因(相手についての情報を含む)に基づき、相手が裏切らないであろうとの予測である個別的信頼の2つが考えられていると述べている。これを教師-生徒関係で捉えたとき、そもそも教師という存在そのものへの一般的信頼と、その後で結ばれる個別的信頼があるのではないかと考えられる。また、山岸ら(1995)はBarberの主張をもとに信頼を次の2つに区別している。その1つは相手の能力に対する期待であり、2つ目は相手の意図に対する期待である。

Eriksonは信頼を「基本的信頼感」と名付け、生後1か月の経験から獲得される自己自身と世界に対する一つの態度としている(Erikson, 1959小此木他訳, 1973)。成人では、基本的信頼の傷つきは基本的不信という形で言い表され、この基本的不信は自分自身や他人とうまくゆかなくなると、独特なやりかたで自分の中に引きこもってしまう特徴があること、精神病状態に退行する人物の場合には典型的に上述のそれが示されることを指摘している(Erikson, 1959小此木他訳, 1973)。つまり、信頼とは相手に寄せる期待であると同時に、自分に対しても向かう心理作用であると考えられる。前述のEriksonを読み解けば、特定の誰かに信頼をもてないまま大人になってしまうことで、例えば何か悩みがあったとしても自分の中だけにそれを留めることで引きこもり傾向を持つようになり、やがて病気になってしまう恐れもある。だからこそ、児童期、青年期の時期に教師と信頼関係を築き、基本的不信に陥らないように関わりを持つということは彼らの人生において重要であることが理解される。

他方、「信頼感」について検討していく。天貝(1995)によると信頼感とは「自分あるいは他人(他の対象)に対して抱く信頼できるという気持ち」であり、自分自身の能力や他人の存在の一貫性についての確信であり、個人の健康的なパーソナリティの発達と密接に結びついているという。その結果、安定した信頼感をもつ場合、人は他者をより支持的であると感じ、対人的な問題を感じる事が少ないのだという。つまり、天貝(1995)を読み解けば生徒が教師に対して信頼感を持って関われるということによって対人的な問題を感じる事が少なくなり、生徒の間に安定した信頼感が保たれることで個人の健康的なパーソナリティにもポジティブな影響があると考えられる。

本研究では上述の先行研究の知見を踏まえ、暫定的に信頼感を世の中において自分や他人に対してもっている信頼できる気持ちとして捉え、その中で教師が生徒とどのように信頼関係を築いていけるのかインタビュー調査から示唆を得ることとする。

3. 生徒-教師間の信頼感に関する先行研究の概観

生徒-教師間の信頼感について、例えば中井・庄司(2006)が挙げられる。彼らは、生徒-教師関係は生徒の友人関係などと同様に学校教育の一つの基盤をなし、生徒の学校適応などに影響を与えていると述べ、生徒の教師に対する信頼感を詳細に検討する必要性を指摘し、「生徒の教師に対する信頼感尺度Students' Trust in Teachers」を作成した。その結果、生徒の教師に対する信頼感が「安心感」、「不信」、「正当性」、の3側面で捉えられるということを明らかにしている。また、片桐(1992)によると、問題行動を取り締まるための厳罰的な生徒指導は生徒に教師への不信感を与え、さらに問題行動や中退を増加させるという。他方、浜名・北山(1987)は教師の指導行動が生徒に及ぼす影響に関する先行研究を概観した結果、学級における生徒の態度や行動と肯定的な関係を示す教師の態度は共感的な指導行動にあるとしている。つまり、生徒に対して安心感、正当性のある関わりは教師にもつ信頼感の形成につながり、逆に教師の生徒を信頼しない姿勢は生徒に教師への不信を抱かせるのではないかと考えられる。小西・稲垣(2010)においても生徒と教師の相互的な対人関係において、積極的な場の共有、教師からの積極的介入、親しげな態度、理解しようと試みる態度など教師による肯定的な言動や行動が、人間としての深い信頼感であるラポール形成に効果的であると述べられている。このように今日、学校における生徒-教師関係のあり方が問い直され、教師が生徒とどのような関わりを通して信頼関係を築くかといった側面が多く研究されている。

上述した先行研究の中では、生徒-教師関係における信頼感をもたせる要因及び信頼関係の重要性が指摘されてきた。このことを踏まえ、本研究では全寮制高等学校の教師が生徒との信頼関係づくりを行っていく上での「安心感」「不信」「正当性」といった要因や教師の肯定的・共感的な指導行動に着目していく。

4. 研究の方法

4. 1 調査対象

全寮制高等学校に勤めるA教師。男性であり、全寮制高等学校での勤続年数は20年以上である。

4. 2 調査時期と調査方法

本研究で使用したインタビューの質問項目は佐竹(2003), 児玉・川本(2015)の先行研究を全寮制高等学校の教師用に改良を加え作成した(Table1)。なお, それらの質問項目は, 稲葉(2021)でも使用した。

調査時期は2020年11月であり, インタビューは, 半構造化の形式を取った。A教師に, 回答は任意であること, 調査対象者の氏名は仮名とし, 個人情報特定されないこと, 研究以外の目的で回答を使用しないことなど倫理事項を説明し了承を採った上で, 質問項目に即して生徒と信頼関係を結ぶために行っている関わり(言動)についてのインタビュー調査を実施した。また, 必要に応じて追質問を加えた。所要時間は約1時間であった。

Table1 インタビュー調査の質問項目

- ①先生自身が感じる, 信頼できる・できない先生のイメージを教えてください。
- ②先生自身が最も信頼関係を築けたと思いつく生徒の特徴と, 信頼関係を作るために意識して行ったことや言葉かけについて教えてください。
- ③現在, 生徒との関わりで信頼関係を築くために心がけていることをいくつでも教えてください。

4. 3 分析方法

本研究ではインタビュー調査で得たA教師が語った語りを逐語録として起こし, 大谷(2007)が考案した4ステップコーディングによる質的分析手法「SCAT(Step for Coding And Theorization)」により分析した。これは面接記録などの言語データをセグメント化し, それぞれに(1)データの中の注目すべき語句, (2)それを言い換えるためのデータ外の語句, (3)それを説明するための語句, (4)そこから浮かびあがるテーマ・構成概念の順に4ステップのコーディングを行い, (1)~(4)をもとにストーリーラインの記述を行う手法である(永井, 2013)。大谷(2007)はSCATの特徴について, 比較的小さな質的データの分析にも有効であること, 質的データから分析を行う際に, 比較的スムーズに理論化を導くことができることなどを挙げている。

インタビューの後, 逐語録として起こした質問項目①, ②, ③の全テキストデータのうち, A教師自身の経験に基づいた教師と生徒の信頼関係づくりの関わり(言動)の具体や考えとして捉えられる語りを抜き出し, それをSCAT法における4ステップコーディングのフォーマットに落とし, 分析を試みた。

5. 結果と考察

上述したSCAT法を用いて, 分析を行った結果を以下に示す。

A教師から導き出された質問項目①「(信頼される, されない教師のイメージ)」の内容を(Table2)で示す。

質問項目①「(信頼される, されない教師のイメージ)」についてのA教師による語りを要約すれば, 生徒全員に信頼されることが難しいことを自覚した上でなお, 教師としてごまかさず誠実な姿勢で関わるのが大切であり, 生徒同士の関係性や生徒自身の成長に重きを置き, 教師が行うのはあくまで支援であるとの考えが示された。SCAT法のストーリーラインを踏まえれば, 生徒自身の成長が大事であるとのA教師の語りはかつて行ったクラスキャンプの経験から自己内省し, 生徒観の捉え直しが図られた結果として生まれたものであることが窺われた。また, 全寮制高等学校ならではの視点として, 寮生活であるがゆえに, 教師と生徒の関係に加えて寝食を共にする生徒同士の関係性がより重要であると語られた。上述した大塚・吉村・津川(2007)においても全寮制高等学校における登校支持要因として「友人」や「寮生活」が挙げられており, 寮生活という通常の高等学校と異なる環境下においては生徒同士の関係性をどのように形成していくかが重要な視点であるとの論述を支持する結果となった。

次いで, 以下に質問項目②「(最も信頼関係を築けたと思った生徒との思い)」の内容について述べていく(Table3)。Table3に示した質問項目②について, A教師は最も信頼関係を築けたと感じた生徒との思い出として初めての担任経験を語った。A教師は, かつてA教師を嫌う生徒がいたものの進路指導を通じて担任として粘り強い指導を行うことによって, 当該生徒との間に信頼関係が形成されていったと感じたとのことであった。太田・太田(2020)においても生徒理解の備わった教師が多い学校では, 進路指導についても前向きである生徒が多いことが指摘されている。A教師のように, 進路相談(面接)は, 生徒の特性や夢また希望などを含む生徒理解と多分に重なり, 信頼関係づくりに効果のあることであることが示唆された。また, SCAT法のストーリーラインを踏まえ, 進路指導を通じて行った教師と生徒の信頼関係形成では, 生徒を超えた人と人との関係性がありつつも, 教師側からは働きかけないという一定の距離感を保った関わりが重要であることが窺われた。赤坂(2016)によれば, 「信頼される教師というのは, 個人的信頼関係を結ぶことに成功した教師」のことである。前述の通り, 進路指導における進路相談(面接)は生徒自身にとっても自分の人生を左右する問題であるがゆえに, 真剣に自己省察し内面に秘めている思いや夢また

は希望などの本音を開示しやすい場であろう。それに対し教師も正面から話を受け止め一緒にもっともよいと思われる進路を模索していく。そのような作業が、言葉と感情のキャッチボールとして機能し個人的信頼関係を形成しやすいのではないとも思われる。質問項目③(生徒と信頼関係を築く上で心がけていること)の内容について述べていく(Table4)。

Table2 SCAT法を用いて行ったA教師の(信頼される, されない教師のイメージ)に関する分析

発話者	テキスト	テキスト中の注目すべき語句	テキスト中の語句の言い換え	左を説明するようなテキストの概念	テーマ・構成概念
A教師	つまり信頼される, されなくて判断するのにさ, 信頼されるように振る舞って形になるじゃん。それは難しいことだと思う。だって信頼される, されなくてその人の気持ちじゃない? 相手に合わせるって形だと違うし。信頼される教師になりたいとは思わない。ただ1個だけは裏切りたくはないなって気がする。人間不信になるような行動はしたくない。そういう意味では一つ大事にするのは相手を一人の人間として向き合うってことなるべくごまかさないうようにしたい。ただ教師って言えないことがあるから本当は言えないってことを言えればいいんだけど場面によっては, それで別のメッセージを送る可能性になることもあるからそういう意味でごまかしてしまう可能性があるかもしれないな。	相手に合わせるって形だと違う。信頼される教師になりたいとは思わない。人間不信, 裏切りたくない。一人の人間として向き合うこととごまかさないうこと。	生徒全員に信頼される教師の難しさ。生徒の人間不信への影響。教師の生徒に対する誠実な姿勢。	信頼される教師への疑問提起。生徒に向き合う教師の資質能力。	生徒全員に合わせる事が難しいと自覚しているからこそ生徒を一人の人間として尊重し, ごまかさず, 誠実に向き合っている教師としての姿勢が大切である。
A教師	僕はここにいるからだと思ってるんだけど。ここで何が印象に残っているかっていうとやっぱり友達との関係だと思うんだよね。僕はそこが大事だと思ってる。ここは高校の場合。だからそういう意味では僕の感覚で言うとか関わりながらもいいけど風景。中心出るといよりは風景だったらいいなって思ってる。関わらないっていう意味じゃないよ。ただ引くっていうんじゃないくて, ここの生徒だからできることだと思うけどアドバイスして, その子が変わっていくための手助けはするけど基本的にその子が自分で変わったなという感覚を持ってほしいなって思ってるっていうか。変えてもらったっていうかあの先生に変えてもらったっていう感覚はなくていいと思ってる。	ここで何が印象に残っているかというやっぱり友達との関係。アドバイスしてその子が変わっていくための手助けはするけど基本的にその子が自分で変わったなという感覚を持ってほしいなって思ってる。	教師-生徒関係より生徒同士の関係性の方が重要。生徒の成長を促すために行う教師の助言。	寮生活での人間関係づくり。教師の助言。	全寮制高等学校では, 生徒同士の関係性, 自ら成長することがより重要であるため, 教師の支援はあくまで助言のみに留まるべきである。
A教師	だから信頼って話しからずれたけど。ひとついうと。一番早く担任持ったのってここに来て2年目なんだよね。〇〇期生だった。さっきはあんなこと言っただけここに来たらこういうクラスにしたいなとか考えたわけ。みんなわきあいあいとして仲良くって。言いたいことも言い合えてさ。そういうイメージを持ってただけだと到底そういう感じではなかったんだよね。始めは。クラスキャンプ行ったときにさ。昔大きなテントがあって男性全員寝たんだ。13人ぐらい。2時過ぎかな。びっくりして行ってみたら滝の奥の方で肉焼いてみんなで上半身裸になって記念撮影してるわけ。で, 怒ったんだよね。めちゃくちゃ。心配したしさ。大体就寝時間もあるしさ。勝手に好き勝手な行動して。でその話ある人にしたんだよね。帰ってから。僕だったらなんで呼んでくれなかったのって言うけど言われたのからうまいかないとか違うって思ってたけど考えたら人ってそれぞれがそれぞれの生き方するわけだからそれでやめたんだよね。もちろん流れに任せるんだけどそれがあふれたりしないように意識はするけど。逆に言えばどういふ流れをするのかわからないし。そんな感じ。だからそういう意味では質問の捉え方として難しいかな。さっきいったように。生徒って先生に好き嫌いあって当然だと思ってるわけ。さっき言ったようにみんなに好かれる先生って難しいし, 目指すべきじゃないと思う。でも一つだけ言えることは自分は嫌いじゃないって言うかここだからそうなのかもしれないけど嫌だなんて思ったことはないかな。生徒見てて。そこは言えるよね。	怒ったんだよね, めちゃくちゃ。でその話ある人にしたんだよね。帰ってから。僕だったらなんで呼んでくれなかったのって言うけど言われたのからうまいかないとか違うって思ってたけど考えたら人ってそれぞれがそれぞれの生き方するわけだからそれでやめたんだよね。もちろん流れに任せるんだけどそれがあふれたりしないように意識はするけど。	クラスキャンプの経験からの反省。生徒を自分の枠にはめない指導。	教師の自己内省。生徒観の捉え直し。	クラスキャンプの経験を通して自らを内省し, 生徒観の捉え直しを図った。
ストーリーライン A教師の語りから生徒全員に合わせる事が難しいと自覚しているからこそ生徒を一人の人間として尊重し, ごまかさず, 誠実に向き合っている教師としての姿勢が大切にしていると窺われる。また, 全寮制高等学校では, 友達同士の関係性, 自ら成長することがより重要であるため, 教師の支援はあくまで助言のみに留まることが望ましいと示唆された。さらに, クラスキャンプを通して自らを内省し, 生徒観の捉え直しを図った経験があくまで生徒自身の成長が最も大事であるという考えにつながっていることが窺われた。		さらに追及すべき点・課題 友達同士の関係性をつくるために教師が行うことのできる関わり(言動)とは何か。 生徒の成長を促すために行う助言には具体的にどういったことが考えられるのか。			

Table3 SCAT法を用いて行ったA教師の(最も信頼関係を築けたと感じた生徒との思い出)に関する分析

発話者	テキスト	テキスト中の注目すべき語句	テキスト中の語句の言い換え	左を説明するようなテキストの概念	テーマ・構成概念
A教師	一人一人特徴はあるで、ただ一つだけぶつかった経験のある生徒のことで思うのはなかなか彼女の気持ちがかんなくて、初めて担任もってぶつかっていった。ある時、授業中けんかして。逃げだして。追いかけていった。寮まで入っていったんだよね。で、寮の扉の前でけんかしたことあるんだよね。女子寮に入っていないでくださいとか言われるんだけど俺は入っていない。廊下にいるだけだとか言っって。その生徒が担任が誰かっていうじゃない。2年の時に担任が僕、持ちあがりて発表された時に大泣きしたんだよね。朝礼で、で誕生日カードでも今は先生おめでとうという気持ちにはなりませんって誕生日カードをもらったんだよね。でも結局、僕がここで大きいなって思っってのはその子の進路と一緒に考える中でだいたいぶ変わってきたんだよね。だから声掛け云々よりも僕が進路指導やっってできるだけ担任の邪魔したくないなって思っってのはそこなんだよ。資料出したり、担任から聞いたらアドバイスするけど個々の将来と一緒に考えてあげられるのは担任が一番いいだろうなっていうのはそういうところがある。で実はその子、行きたいところ受からなくて浪人して実は○の○の子だったから月に1回教えに行っったんだよね。で、そのあととも色々あった時に相談しに来てくれてで今、○やっってんだけどその時も相談に来てくれて。で、学校に入るための理数系はアドバイスしてあげて。面倒見上げてっっていうそんなことがあった。逆にその子はともぶつかったっというかわれた思い出があるから覚えてるってこともあるし。でもあんまり気にしない。僕。だからさっき言っつたみたいには好き嫌いあるもん。僕のせいでも人間不信にならないでほしいとかさういうことは思うけど。そんなことかな。	初めて担任もってぶつかっていった。でも結局、僕がここで大きいなって思っってのはその子の進路と一緒に考える中でだいたいぶ変わってきたんだよね。だから声掛け云々よりも僕が進路指導やっってできるだけ担任の邪魔したくないなって思っってのはそこなんだよ。	生徒とぶつかった初めての担任経験。進路指導を通じた粘り強い指導。担任としての進路指導のあり方	生活指導、進路指導を通じた信頼関係づくり、担任の役割	初めて担任を持った際に、粘り強い進路指導を通して生徒と信頼関係が形成された。
A教師	関係性だよね。生徒だからじゃなくて、それは多分自分が親しい同級生や先輩といるのと変わらないと思うな。ただ1個だけ考えているのは、東京とか行くじゃない。基本的に連絡はしないだよね。さっきも言っつたように僕は僕で思っくたそれと相手に求めたないって感じかな。だから背景でありたい、風景でありたいって思っくたそれはそんな感じかな。だから自分が筆不精であることもあるかもしれないけど基本的に返事書かないんだよ。結構疎遠になりつつそれでも何かあった時手紙くれたりしてくれるからうれしいなって思っくた。	生徒だからじゃなくて、それは多分自分が親しい同級生や先輩といるのと変わらないと思うな。僕は僕で思っくたそれと相手に求めたないって感じかな。	生徒を超えた人と人との関係性。教師と生徒の距離感。	生徒との関係性	生徒だからではなく、人と人との関係を意識しつつも、教師側から働きかけない関わりが生徒との関係性では重要である。
<p>ストーリーライン A教師の語りから初めて担任を持った際に、粘り強い進路指導を通して生徒と信頼関係が形成された思い出が語られた。その上で生徒との信頼関係形成では生徒だからではなく、人と人との関係を意識しつつも、教師側から働きかけないある程度の距離感を保った関わりが重要であることが窺われた。</p>		<p>さらに追及すべき点・課題 教師と生徒の人と人としての関係性はどこまで許されうるのか。</p>			

Table4 SCAT法を用いて行ったA教師の(生徒と信頼関係を築く上で心がけていること)に関する分析

発話者	テキスト	テキスト中の注目すべき語句	テキスト中の語句の言い換え	左を説明するようなテキストの概念	テーマ・構成概念
A教師	一つはなるべく正直であろうとすること。あとは基本的に自分の感情をぶつけない。だから生徒に話す時はゆったりした気持ちで話す。イライラとかしながら生徒と話すことはしない。	正直であろうとする。自分の感情をぶつけない。	正直。気持ちのコントロール。	教師としての姿勢。	生徒と関わる際の姿勢として正直であること、自分の感情をぶつけないことが重要である。
A教師	僕は教師である自覚を持ってるんだよね。先生によっては自分は教師じゃない方がいいって人もいるけど。僕は自分が教師だと思っってなぜかという生徒からは教師として見られてるから。それはなぜかっていうと例えば成績をつけるってことも全部そうだし、ある意味で権力者なんだよね。なにかしたってなっても教師の許可を取らないといけないって、怒られる対象にはなるわけじゃない。っていうことは教師の発言っていうのは教師を傷つけることになるわけ。自分が意図してなかったとしても生徒としてはある種の権力者だから教師は。その権力者が感情をぶついたら暴君でしよ、それは。あとは基本的に指示を与えるっていう形はしないようにしたい。自分で道とか方向とかをさせるようにしたいという願ひがある。みんなの中にはそういうものを持ってるって思ってるし大事なのはこの高校で言うると自己実現すること。そのためには自分の願ひとか思いを大切にすること。逆に言うと結構自分の思いを出せない子は多いと思っってだから周りのことを気にしたり怒られるからとか。だからそういう意味も込めて今のうちに自分の願ひを出すってことは大事にする必要があるかなって思っくた。	僕は自分が教師だと思っってなぜかという生徒からは教師として見られてるから。ある意味で権力者なんだよね。あとは基本的に指示を与える形はしないようにしたい。大事なのはこの高校で言うると自己実現すること。	自分が権力を持った教師であるという自覚を持つ。大切なのは生徒自らの自己実現である。	教師としての自覚。生徒の自己実現。	生徒と関わる際には自分が教師であると自覚した上で、生徒の自己実現のためにも支持をあまり行わない意識を持つことも大切である。
<p>ストーリーライン A教師の語りから生徒と関わる際の姿勢として正直であること、自分の感情をぶつけないことが重要であることが窺われた。また、生徒と関わる際には自分が教師であると自覚した上で、生徒の自己実現のためにも指示をあまり行わない意識を持つことも大切である。</p>		<p>さらに追及すべき点・課題 生徒の自己実現のために行うことのできる関わり(言動)は何か。</p>			

『生徒と信頼関係を築くために心がけていること』に関してA教師は、生徒に接する際には正直であることと自分の感情をぶつけないことを語った。三浦(2017)においても、教師がアンガーマネジメントを身につけ怒りの感情と上手に付き合うことが大切であると指摘されている。教師も人間である以上、そして生徒と真剣に向き合うほど、生徒に対し喜怒哀楽の感情をもつことは必至であろう。しかしながら、教師が教師であることから、生徒に正直でありつつも自らの感情を生徒にぶつけないという姿勢は重要であろう。A教師の語りはそのことの自覚を示していると受け止められる。また、その上でSCAT分析のストーリーラインを踏まえ、生徒と関わる際には自身が生徒に対して権力を持つ教師であることを自覚した上で、生徒自らの自己実現のためにもあまり指示を行わないようにしているとも語った。生徒自身の成長を望み、教師が介入しすぎることなく支援していくことが重要であると考えられていることが窺われた。

6. 全体的考察

本研究は全寮制高等学校に勤めるA教師へのインタビュー調査から、全寮制高等学校において教師が生徒と信頼関係をつくるためにどのような関わり(言動)が行われているのかを調査し、関わり(言動)方に示唆を得ることを目的とした。インタビューの全テキストデータのうち、A教師の語りから教師と生徒の信頼関係づくりの関わり(言動)の具体や考えと思われる部分を抜き出し、質問項目①(信頼される、されない教師のイメージ)、②(最も信頼関係を築けたと感じた生徒との思い出)、③(生徒と信頼関係を築く上で心がけていること)ごとに整理した。その際の分析方法は大谷(2007)が考案したSCAT法を用いた。

結果、質問項目①でA教師は自ら信頼される教師になるよりも生徒全員に信頼されることが難しいことを自覚した上でなお、教師としてごまかさず、誠実な姿勢で関わることの大切さ、生徒同士の関係性、生徒自身の成長に重きを置き、教師が行うのはあくまで支援であると語った。その上でSCAT法のストーリーラインを踏まえ、そういった生徒自身の成長が大事であるとの考えはA教師がかつて行ったクラスキャンプの経験から生まれたものではないかと推察された。また、全寮制高等学校ならではの視点として、寮生活であるがゆえに、教師と生徒の関係より生徒同士の関係性がより重要であると示唆された。大塚・吉村・津川(2007)においても全寮制高等学校における登校支持要因として「友人」や「寮生活」が挙げられており、寮生活という通常の高等学校と異なる環境下においては生徒同士の関係性をどのように形成していくかが重要な視点であるとの論述を支持する結果となった。

質問項目②でA教師は最も信頼関係を築けたと感じた生徒との思い出として初めての担任経験を語った。そこでA教師はかつてA教師を嫌う生徒がいたものの、進路指導を通じて担任として粘り強い指導を行うことによって、当該生徒との間に信頼関係が形成されていったとのことであった。また、SCAT法のストーリーラインを踏まえ、進路指導を通じて行った教師と生徒の信頼関係形成では、生徒を超えた人と人との関係性がありつつも、教師側からは働きかけないという一定の距離感を保った関わりが重要であることが窺われた。赤坂(2016)によれば、「信頼される教師というのは、個人的信頼関係を結ぶことに成功した教師」(再掲)のことであると指摘されており、A教師が行った進路指導における進路相談(面接)の過程が、言葉と感情のキャッチボールとして機能し個人的信頼関係を形成しやすいのではないとも思われた。

質問項目③(生徒と信頼関係を築く上で心がけていること)でA教師は生徒に接する際には正直であることと自分の感情をぶつけないことを心がけていることとして語った。また、その上でSCAT法のストーリーラインを踏まえ、生徒と関わる際には自身が生徒に対して権力を持つ教師であることを自覚した上で生徒自らの自己実現のためにもあまり指示を行わないことが重要であると窺われた。三浦(2017)においても教師がアンガーマネジメントを身につけ怒りの感情と上手に付き合うことが大切であると指摘されており、教師が教師であることから、生徒に正直でありつつも自らの感情を生徒にぶつけないという姿勢は重要であろうと窺われた。

上述した2、3にて示された生徒が教師に信頼感をもつうえで「安心感」「不信」「正当性」といった要因(中井・庄司, 2006)や教師の肯定的・共感的な指導行動(浜名, 北山, 1987)に着目すると、質問項目①(信頼される、されない教師のイメージ)から読み取った“生徒を裏切りたくはない”という発言を含む教師としてごまかさず、誠実な姿勢で関わる姿勢や質問項目③(生徒と信頼関係を築く上で心がけていること)で語った生徒に接する際には正直であることと自分の感情をぶつけないようにしているという意識は、中井・庄司(2006)で示された“先生は真面目であると思う”などといった「正当性」とつながりがあるのでないかと思われた。このことより、全寮制高等学校における教師による生徒との信頼関係づくりでは、生徒に公正・公平に関わる態度が大切であることが示唆された。

また、質問項目③では生徒と関わる際には自身が生徒に対して権力を持つ教師であることを自覚した上で、生徒自らの自己実現のためにもあまり指示を行わないことの大切さが窺われた。文科省(2009)において示された「生徒の徳育の充実に向けた在り方について(報告)」によると、高等学校の時期になると中学校時代の思春期の混乱から脱しつ

つ、大人の社会を展望するようになり、大人の社会でどのように生きるのかという課題を真剣に模索するようになるという。今回のインタビュー調査においても質問項目③で「大事なものは自己実現すること」と語られていたように、教師が積極的に介入(リード)していくというよりも、その過程における生徒の考えを尊重し、その目標達成に向けて支援していくことがより望ましいのではないかと窺われた。

7. 今後の課題

本研究における課題は、インタビュー調査におけるサンプル数の少なさである。性別、年代ごとに細かく検討し、比較検討し、共通性を見出すことで全寮制高等学校における教師が行う生徒との信頼関係づくりのモデルを構想していく必要がある。

また、風間(1997)は自身が勤める全寮制高等学校において「自分たちの生活は自分たちで整える」ことを生活の基本にしており、普通高校でありながら寮生活の中で「作業」という時間を設け、「調理」などの当番もあると述べている。上述したように大塚・吉村・津川(2007)においても全寮制高等学校における注目すべき登校支持要因として「寮生活」が挙げられている。今回のインタビュー調査において寮生活に際し、実際にA教師が行った関わり(言動)に関する語りはそれほど見受けられなかった。ただし風間(1997)、大塚・吉村・津川(2007)の論述を踏まえると本研究で示した自らやりたいことを見つける、または目標達成するための支援に加え、寮生活での教師の関わり(言動)が全寮制高等学校における生徒との信頼関係づくりに重要であることが窺われる。そのため、今後は全寮制高等学校に勤める教師のインタビュー対象者を拡大していく中で寮生活での関わり(言動)の視点も踏まえ、検討していく必要があると示唆された。

引用文献

- (1)赤坂真二(2016) 学級を最高のチームにする極意. 信頼感で子どもとつながる学級づくり. 協働を引き出す教師のリーダーシップ. 中学校編. 明治図書出版株式会社
- (2)天貝由美子(1995) 高等学校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響. 教育心理学研究, 43, 364-371
- (3)Erik Homburger Erikson(1959) Identity and the Life Cycle International Universities Press Inc./エリク・H・エリクソン 小此木啓吾・小川捷之・岩男寿美子訳(1973) 自我同一性-アイデンティティとライフ・サイクル-. 誠信書房
- (4)浜名外喜男・北山鎮道(1987) 教師行動の実験的変容が児童の学級適応に及ぼす影響. 兵庫教育大学研究紀要, 63-73
- (5)本間友巳(2003) 中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応. 教育心理学研究, 51, 390-400
- (6)稲葉光(2021) 教師と生徒の信頼関係づくりに関する研究-教師の関わり(言動)に着目して-. 上越教育大学大学院学校教育研究科修士論文(未公開)
- (7)片桐隆嗣(1992) 教師-生徒関係固定化のメカニズム./門脇厚司・陣内靖彦編 高校教育の社会学-教育を蝕む〈見えざるメカニズム〉の解明-. 東信堂
- (8)風間文子(1997) 聖書に基づく人間教育-森の中の全寮制教育-キリスト教愛真高等学校. 学習評価研究, 8-2, 56-71
- (9)児玉真樹子・川本竜太郎(2015) 教師と児童の教師に対する信頼感との関係-発達段階に着目して-. 学習開発学研究, 8, 81-88
- (10)小西一博・稲垣応顕(2010) 転校を伴う外国人(ブラジル人)児童の学校適応に関する事例的研究-教師とのラポール形成に焦点を当てて-. 上越教育大学研究紀要, 29, 33-43
- (11)三浦和美(2017) アンガーマネジメントの視点から教員がアンガーマネジメントを身につけ怒りの感情と上手につき合うことが大切. 相続教育技術, 71-15, 48-55
- (12)文部科学省(2009) 生徒の徳育の充実に向けた在り方について(報告) 3子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題. 文科省HP(最終閲覧日, 令和3年1月3日)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1286156.htm
- (13)文部科学省(2019) 平成30年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査. 文科省HP(最終閲覧日, 令和3年1月8日)
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/1410392.htm
- (14)永井拓己 都市コミュニティにおけるボランティア活動の継続に関する一考察-SCAT 法によるテキストデータ分析の試み-. 日本福祉大学健康科学論集, 16, 47-53
- (15)中井大介・庄司一子(2006) 中学生の教師に対する信頼感とその規定要因. 教育心理学研究, 54, 453-463
- (16)中井大介・庄司一子(2008) 中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連. 発達心理学研究, 19-1, 57-68
- (17)大谷尚(2007) 4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案-着しやすく小規模データにも運用可能な理論化の手続き-. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 54-2, 27-44
- (18)太田俊一・太田和樹(2020) 生徒との信頼関係を築く生徒理解の在り方. 北翔大学短期大学部研究紀要, 58, 23-31

- (19)大塚道子・吉村宣彦・津川秀夫(2007) 全寮制高等学校における登校支持要因. 日本心理学会第71回大会論文集
- (20)佐竹圭介(2003) 教育現場における教師に対する生徒の信頼感の研究. 九州大学心理学研究, 4, 195-201
- (21)高見令英(2004) 第5章 生徒指導における教育相談. /稲垣応顕・犬塚文雄(編) わかりやすい生徒指導論 改訂版. 文化書房博文社
- (22)山岸俊男・山岸みどり・高橋信幸・林直保子・渡部幹(1995) 信頼とコミットメント形成-実験研究-. 実験社会心理学研究, 35, 23-34

A study on building trust among teachers and students in boarding high school

– focusing on teacher’s relationships (words and actions) –

Hikari INABA* · Misaki MATSUSHIMA* · Masaaki INAGAKI**

ABSTRACT

This study captures what kind of teacher’ relationship (words and actions) have in order to build a relationship of trust with students in boarding high schools from an interview survey with teacher named “A” who works in a dormitory high school. The purpose was to get suggestions. Organize by question items ①(image of teachers who are trusted and not trusted), ②(memories with students who feel that they have built the most trusting relationship), and ③(what they keep in mind when building trusting relationships with students). The analysis method used at that time was the SCAT method devised by Otani (2007). As a result, in question item ①, it was suggested that the relationship between students is more important than the relationship between teachers and students because of the dormitory life, as a viewpoint unique to dormitory high school. In question item ②, in the formation of a relationship of trust between teachers and students in dormitory high schools, there is a relationship between people beyond the students, but the teachers do not work with each other, maintaining a certain sense of distance. It was found to be important. Question item ③ says that what is important in high school is “self-actualization”, and rather than the teacher actively intervening (leading), respecting the students’ ideas in the process and their goals It was suggested that it would be more desirable to support for the achievement. As a future task, it can be seen that the involvement (words and actions) performed in the dormitory life is important for building a relationship of trust with the students in the dormitory system high school based on the previous research, and the number of interviewees will be expanded. It was suggested that it is necessary to consider it from the viewpoint of involvement (words and actions) in dormitory life.